生徒指導主任の特性及び生徒指導上の諸問題に対する意識の実態調査 ～生徒への有効な関わり方とは～

内田　利広・伊賀　真志*

An actual condition survey on the characteristics of chief teachers participating in student guidance and their feelings on problems in this field
－ effective involvement with students －

Toshihiro UCHIDA and Masashi IGA*

Accepted July 2, 2008

抄録：本論は，生徒指導を行う上で教師として必要な態度，意識としてはどのようなものがあるのかを明らかにするために，生徒指導主任への調査・インタビューを行ったものである。予備調査において生徒指導上必要と考えられる特性（態度）を 50 項目取り上げ，因子分析を行った。その結果，「受容」「指導力」「ゆとり」の 3 因子が抽出された。「指導力」については，保健体育の教師とそれ以外の教師の間に有意な差が見られ，保健体育の教師の方が高いことが示された。さらに，生徒指導上の重要な特性として，「信頼されていること」とともに「間違ったことは毅然と厳しく指導ができる」という項目が上位に位置しており，最終的には，「受容」と「指導力」のバランスが重要ではないかということが示唆された。

索引語：生徒指導　必要な特性，指導力，ゆとり

Abstract : This study clarifies the attitudes and feelings of teachers in charge of student guidance. In the preliminary investigation, 50 factors were picked up as teachers' characteristics required in student guidance, and by the factor analysis, 3 factors, 'acceptance', 'leadership', and 'being more relaxed' were extracted. Regarding 'leadership', there was a statistically-significant difference between PE teachers and other teachers (PE teachers have higher scores in 'leadership'). And as important characteristics in student guidance, such factors as 'being trusted' and 'being able to teach firmly and strictly against misdeed' were selected. In conclusion, it is suggested that the point is the balance between 'acceptance' and 'leadership'.

Key Words : student guidance, characteristics required in student guidance, leadership, being more relaxed

* 綾部市立東陵中学校教諭

Ⅰ．問題と目的

文部科学省（2007a）は「生徒指導は学校の教育目標を達成するための重要な機能の一つであり，一人一人の幼児児童生徒の人格を尊重し，個性の伸張を図りながら，社会的な資質や行動力を高めるように指導・援助するものである。すなわち，生徒指導はすべての幼児児童生徒の人格のよりよき発達と学校生活が有意義で興味深く，充実したものになることを目指すものであり，単なる問題行動への対応という消極的な面にとどまるものではない。」としている。しかし教育再生会議では，いじめ問題に関する緊急提言（平成 18 年 11 月 29 日）を出し，又，問題行動だけでなく，不登校や別室登校はどの学校にもありえる大きな問題となっている。昔も今も現実的には問題行動等の生徒指導上の諸問題は教師の大きな悩みであり，子どもたちを含め，親や家族にとっても深刻な問題といえる。又，インターネットや携帯電話も普及し，それが問題事象につながるなど，新たな問題も出現している。各家庭の格差も広がり，経済的に厳しい状況で，ゆとりが持てず，子どもへの教育にまで行き届かない現状も耳にする。一方発達障害が広く認知されるようになってきたが，現実には発達障害の生徒が問題事象を引き起こし，その指導法について悩む教師も少なくはない。以前は家庭で行われていた教育を学校がせざるを得ない状況もあり，それが教師のゆとりを奪うという悪循環をもたらしていることもある。

したがって，問題行動等の指導・支援は学校現場では現在も切り離せない課題となっている。そのような現実から各学校で生徒の課題はそれぞれに存在し，それぞれの学校で生徒にあった指導は重要であるが，現在，指導がしっかりできる生徒指導力のある教師にはどのような特性が備わっているのか。又，普遍的とまでは行かなくとも，今の時代に共通して取り組むべき事は何なのか，ということに着目した。

本研究では，まず，予備調査において生徒指導で必要な特性を聞き出し，その特性を元に，本調査によって，現場で生徒指導の中心となり，生徒指導力を発揮し，その役割を果たされている生徒指導主任の特性を理解しようと考えた。又，その大きな課題である生徒指導上の諸問題に関するタイムリーな実態を少しでも多く把握するために，直接インタビューを行い，様々な実践例を聞き出して考察し，今後の生徒指導に役立てるものになればと考える。

Ⅱ．方法

1　質問紙調査

(1) 調査の対象

予備調査において 50 種類に絞った特性についての質問紙を京都府下における各公立中学校の生徒指導主任 98 名に配布し，その特性の必要性と自身の実態についての回答をお願いした。

(2) 調査の時期と方法

平成 19 年 10 月 5 日に各校に郵送し，約 1ヶ月の記入期間を経て郵送による回収を行った。

(3) 調査内容

生徒が生徒指導上の問題を起こした時，しっかりと指導ができる教師の特性（予備調査で確認した 50 項目）について，自身の思う「必要性」の程度（必要度）と，実際にそのような態度で接している

か（実態），の 2 つについて 4 件法により，答えてもらった。また，特に自身が必要と思う上位 5 つの特性についても答えてもらった。なお，生徒指導主任の実態と各特性との関連を調べるために，性別，担任の有無，所属地域，教職経験年数，通算生徒指導主任経験年数，専門教科，担当の部活動，所属学年，生徒数を回答していただいた。

2　生徒指導主任への面接調査

(1) 面接調査の対象

本調査の分析結果から専門教科別（保健体育とその他の教科）の検定で有意な差が見られた。そこで保健体育とその他の教科の教師からインタビューにより生徒指導に関わる実態の生の声を聞くことにした。専門教科が保健体育と，その他の教科，さらに比較的少人数の学校と生徒数の多い学校に分けた生徒指導主任の先生方 4 名及び，京都府下では非常に少ない女性の生徒指導主任の先生 1 名，計 5 名のインタビューを行った。なお，インタビューの可否はあらかじめ本調査により尋ねた。

(2) 調査の方法

許可をいただいている先生方の中から，直接電話で日程の都合を確認し，勤務校を訪問し，30 ～ 40 分程度のインタビューを行った。

Ⅲ．結果と考察

1　質問紙調査の結果と考察

(1) 因子分析の結果

質問紙調査の結果は，郵送した 98 名中 66 名から回収できた（回収率 67%，有効回答 65 名）。

生徒指導上の諸問題（問題行動等）を起こしたとき，しっかり生徒指導を行うことのできる教師の特性については，回答した特性の実態についての因子構造を検討するため 50 項目に対して，主因子法・Kaiser の正規化を伴うバリマックス法による因子分析を行った（表 1)。その結果，固有値の変化の度合いや因子の解釈可能性から 3 因子構造が妥当であると判断した。なお，因子負荷量が不十分であった 9 項目については除外した。

第 1 因子は 16 項目から構成されており，「あたたかさ，やさしさ」，「心が広い」，「信頼されている」など，社会人として人間関係を形成していく上で必要とされる項目群であり，【受容】と命名した。

第 2 因子は 15 項目から構成されており，「何事も最後までやりきらせることができる」，「授業規律がある」，「指導の手順がよい」など，学校の教師とてして必要とされる項目群であり，【指導力】と命名した。

第 3 因子は 10 項目から構成されており，「感情的にならない」，「明るく笑顔が多い」，「心に余裕がある」など，教師自身が落ち着いた生活を送ることによって発揮されやすいと考えられる項目群であり，【ゆとり】と命名した。

こうして抽出された因子を見てみると，生徒指導を行うにあたって，重要な特性は大きく 3 つの特性に分類されることが分かる。【受容】と【指導力】は二律背反する内容であるがバランスを保ちながら，両方の特性をうまく身につけることが，高い生徒指導力へとつながることが考えられる。また，教師という仕事は忙しい毎日であるが【ゆとり】がなくては，生徒への指導にも影響が出てくることも

忘れてはならない。したがって，そのゆとりをどう持つかというのも学校現場の大きな課題といえる。なお，信頼性を検討するために因子それぞれの α 係数を算出したところ，第 1 因子が α ＝ .93，第 2 因子が α ＝ .93，第 3 因子が α ＝ .84 との結果が得られ，信頼性が確認された。

表 1　因子分析結果

質問項目		因子負荷量 F1	F2	F3
受容（α ＝ .93）				
1 ②	あたたかさ、やさしさがある	0.718	0.219	0.153
5 ②	心が広い（寛容、受容）	0.680	0.266	0.139
11 ②	ほめることがしっかりできる	0.667	0.158	0.220
37 ②	生徒への愛情を持っている	0.654	0.277	-0.141
16 ②	聞くことが上手	0.645	0.175	0.309
38 ②	自分の意見を押しつけない	0.642	0.026	0.283
48 ②	声かけがうまい	0.607	0.306	0.464
8 ②	共感的な態度がとれる	0.592	0.358	0.176
29 ②	生徒の立場の理解ができる	0.592	0.253	-0.105
39 ②	本音を語れる	0.569	0.387	0.005
3 ②	信頼されている	0.564	0.251	0.156
10 ②	子どもとたわいのない話ができる	0.547	0.286	0.080
12 ②	自分の経験を語ることができる	0.547	0.234	0.053
25 ②	忙しくても生徒の相談に応じられる	0.523	0.315	0.144
35 ②	生徒に見通しを持たすことができる	0.518	0.481	0.232
50 ②	自分の失敗はすぐに認めることができる	0.508	0.261	-0.172
指導力（α ＝ .93）				
21 ②	何事も最後までやりきらせることができる	0.220	0.746	0.274
20 ②	熱心な部活指導ができる	-0.060	0.688	0.092
9 ②	間違いや甘えを許さないきっちりとした基準をもち謝ったことには毅然と厳しく指導ができる	0.233	0.674	0.177
4 ②	子どもに対する熱い思いがある	0.223	0.638	0.116
19 ②	授業規律がある	0.310	0.623	-0.057
43 ②	個に応じた指導（臨機応変な対応）ができる	0.437	0.558	0.124
41 ②	諸問題を早期発見できる	0.495	0.554	0.141
40 ②	いろいろな体験をさせられる	0.380	0.545	0.271
45 ②	長期的な視野を持って忍耐強く指導できる	0.478	0.535	0.288
44 ②	生徒の活躍できる場面を仕掛け、評価し自信をもたせることができる	0.449	0.528	0.321
42 ②	いじめを許さない姿勢がある	0.383	0.517	-0.143
27 ②	熱中できるものを持っている	0.040	0.512	0.332
33 ②	常に全力でのぞむ	0.432	0.510	-0.033
7 ②	納得させる説得力（わかりやすいことば）がある	0.285	0.503	0.361
17 ②	指導の手順がよい	0.430	0.503	0.161
ゆとり（α ＝ .84）				
36 ②	感情的にならない	0.249	-0.032	0.596
26 ②	一芸に秀でている	0.202	0.169	0.580
22 ②	言葉遣いがよい	0.335	0.075	0.568
30 ②	指導のセンスがある	0.480	0.270	0.567
46 ②	みんなの前では叱らない	-0.031	0.152	0.492
23 ②	日常的に家庭訪問ができ保護者と連携できている	0.446	0.369	0.403
15 ②	明るく笑顔が多い	0.485	-0.053	0.385
18 ②	『わかる授業』ができる	0.467	0.396	0.349
32 ②	心に余裕がある	0.429	0.315	0.344
47 ②	生徒が一緒にいて楽しいと感じる	0.483	0.016	0.315
	累積寄与率（%)）	36.4	42.5	47.7

(2) 各因子得点について

次に,【受容】,【指導力】,【ゆとり】の各因子の因子得点を計算し，担任の有無，地域別（南北），主任経験年数（4 年までと 5 年以上）と（2 年までと 3 年以上），教科別（保健体育と他教科），学校規模（251 人以上と 250 人以下）などの属性による差を比較するため t 検定を行った。なお，男女の比較は人数の差がありすぎるため，信頼性に欠けると判断し，t 検定を行わなかった。

その結果，担任の有無，地域別（南北），主任経験年数（4 年までと 5 年以上）と（2 年までと 3 年以上），生徒数（251 人以上と 250 人以下）では有意差は認められなかったが，教科別の【指導力】（表 2）で有意差が認められた。保健体育教諭の方がその他の教諭よりも【指導力】が高いと自己判断しているということである。【指導力】の中には学校の教師として必要とされる項目と前述したが，もう少し違った視点から見ると，この項目の中には「厳しさ」が見えてくる。保健体育教諭は，おそらくほとんどが中学・高校・大学時代に専門の競技を行っており，その中で培われた厳しさがあるだろうし，同じ保健体育科の教師にその厳しさを教えてもらうことも多々あると考えられる。それがこの結果につながったと推測される。

また，教職経験年数別，所属学年別，教育局別，部活動別の各因子得点の比較をするために分散分析を行った。その結果，全てにおいて有意差は認められなかった。

表 2　教科別（保健体育と他教科）による生徒指導主任の特性実態の t 検定

		保健体育 〈40〉	他教科 〈25〉	t 値	
因子 1	受容	48.41 (6.93)	46.83 (6.55)	1.12	n.s.
因子 2	指導力	45.67 (6.91)	41.17 (6.40)	2.58	＊
因子 3	ゆとり	25.59 (4.70)	25.75 (4.33)	-0.35	n.s.

〈 〉は人数 （ ）は標準偏差　＊＝ P ＜ .05　n.s. ＝ non significant

(3) 各項目得点について

①必要と思う特性と実態の差の検定

上記の分析では多くの項目について有意差が認められなかったため，さらに細かく分析するために，項目毎に生徒指導主任自身が必要と思う特性と実態の差の検定を行った。その結果，ほとんどといえる 48 の項目で有意差が認められた。48 項目中 45 項目において必要性の平均値は 3 以上であり，実態は必要度の平均値を下回り，その特性が必要と思いながらも，自身にはそれほど備わっていないということが分かる。各学校の生徒指導におけるリーダー的な存在である生徒指導主任においても，今後努力をして，身につけるべき特性があるということである。今回の項目の必要度が高いということは，予備調査により出てきた項目であることを考えれば，当然の結果であり，予備調査において先生方が必要と思われた特性は，京都府下の多くの生徒指導主任とも共通する内容であったと考えられる。

平均値が 2 以上 3 未満でさほど必要と感じないが，実態も備わっていないのが，項目 26「一芸に秀でている」（平均値 2.28）と項目 46「みんなの前では叱らない」（平均値 2.71）である。項目 26「一芸に秀でている」は中央値の 2.5 を基準に考え，数値が高くなるほど必要度が高く，低くなるほど必要度

は低いという考えで見ると，どちらかというと必要では無いほうに分類されるが，さらに実態でも秀でたものを持っていないということが言える。項目 46「みんなの前では叱らない」はどちらかというと必要という方に分類されるが，有意差が出ているということから，みんなの前では叱らないほうが良いと思っているにも関わらず，叱ってしまう現状があると言える。

有意差が出なかった 2 つの項目は，項目 13「高圧的でない（大声で怒らない等)」と項目 27「熱中できるものを持っている」であるが両方ともにどちらかというと必要といえる結果であり，その必要度通りの実態であると言える。

②実態において生徒指導主任の特性により差のでた項目について

生徒指導主任が感じる実態についての質問に対して，担任の有無，地域（南北別)，主任経験年数（4 年までと 5 年以上）と（2 年までと 3 年以上)，教科（保健体育と他教科)，生徒数（251 人以上と 250 人以下）の平均値を比較するため t 検定を行った。

表 3　専門教科（体育とその他）別のによる生徒指導主任の特性実態の t 検定

	項目	体育 〈40〉	その他 〈25〉	t 値
9	間違いや甘えを許さないきっちりとした基準をもち誤ったことには毅然と厳しく指導ができる	3.17 (0.74)	2.77 (0.61)	2.10 ＊
14	公平に生徒と接する	3.33 (0.59)	2.95 (0.58)	2.40 ＊
19	授業規律がある	3.39 (0.60)	3.05 (0.49)	2.39 ＊
20	熱心な部活指導ができる	3.5 (0.56)	3.05 (0.72)	2.68 ＊
24	保護者に対して謙虚な姿勢がとれる	3.39 (0.55)	2.82 (0.66)	3.54 ＊
28	生徒との約束を守る	3.61 (0.49)	3.14 (0.47)	3.67 ＊
33	常に全力でのぞむ	2.83 (0.74)	2.36 (0.58)	2.54 ＊
42	いじめを許さない姿勢がある	3.67 (0.48)	3.23 (0.43)	3.52 ＊
43	個に応じた指導（臨機応変な対応）ができる	3.44 (0.59)	2.77 (0.61)	4.29 ＊＊
48	声かけがうまい	2.81 (0.75)	2.41 (0.67)	2.04 ＊
50	自分の失敗はすぐに認めることができる	3.33 (0.68)	2.95 (0.58)	2.27 ＊

〈〉は人数（）は標準偏差　　＊＊＝ P ＜ .01　　＊＝ P ＜ .05

専門教科別（体育とその他）の実態（表 3）では項目 9「間違いや甘えを許さないきっちりとした基準をもち誤ったことには毅然と厳しく指導ができる」，項目 14「公平に生徒と接する」，項目 19「授業規律がある」，項目 20「熱心な部活動ができる」，項目 24「保護者に対して謙虚な姿勢がとれる」，項目 28「生徒との約束を守る」，項目 33「常に全力でのぞむ」，項目 42「個に応じた指導（臨機応変な対

応）ができる」，項目 48「声かけがうまい」，項目 50「自分の失敗はすぐに認めることができる」の 11 項目において有意差が認められた。専門教科別の実態の検定は，【指導力】因子得点においても唯一有意差が出た因子なので，今回の項目別の t 検定で多くの項目で有意差が出ることは予想されていた。11 項目中 6 項目については【指導力】因子に分類される項目である。このことから先にも述べたが保健体育科教員は，【指導力】，特に厳しさをもっていることが実態からよく分かるが，受容因子である，項目 48「声かけがうまい」，項目 50「自分の失敗はすぐに認めることができる」も他の教科の教員よりも高い実態を示している。この結果より，生徒と関わりを持つための話術と，素直な人間性の重要性を感じる。残りの 3 項目は因子負荷量が不十分であったために 3 因子からは除外された項目であるが「公平」，「謙虚な姿勢」，「約束を守る」という言葉からやはり，素直な人間性の重要性を改めて感じる項目である。厳しい中にも人間的な暖かみを併せ持つことの重要性を保健体育教員から学ぶことができるのではないだろうか。

以上，生徒指導主任の実態を見てきた。特に必要性を感じながらも実態が追いついていない項目が多々あることがよく分かる。自身の実態を見つめ改善できるところは努力をし，生徒のために特性を磨くことが教師としての使命と考えるが，先にも述べたが，個人のレベルアップだけではなく，やはり，連携して組織的に対応することの重要性を改めて感じる。

(4) 各項目の必要度や平均値の順位から見た特性について

ここでは，生徒指導主任が 50 項目の中から，特に必要度の高いものとして選んだ 5 つの項目でどの特性が上位を占めているのかという順位，全項目での必要性の平均値の順位，全項目での実態の平均値の順位，必要性の平均値から実態の平均値を引いた順位を表にしてまとめ，考察するものとする。

①生徒指導主任において必要度が高いと選択された項目

生徒指導主任にアンケートに協力いただいた全 50 項目の特性の中から，特に必要と感じる特性を 5 つ選んでもらい，1 項目 1 点と計算し，どの特性が多く選択されたかを見る表が，以下に示す「主任が必要と選んだ特性順位」（表 4）である。これは生徒指導主任がこれまでの経験の中で直感的に選んだものであり，教師と生徒との関わりの中でどんな特性を重要視すべきか参考になるものである。断トツのトップとなっている特性は「信頼されている」である。やはり生徒指導の基本は生徒との信頼関係にあるということがこの結果から読み取れる。信頼されているがゆえに指導が入るという流れになることは納得できるものである。その信頼獲得のために他の具体的な多くの特性があるといっても過言ではないだろう。そのためにキーワードになってくるのが「生徒理解」と「教師自身の理解」ではないかと考える。そして指導の中で正しい「信念」をもち，ぶれずに指導していくことが「信頼」につながるのではないだろうか。他の上位の特性を見ても信頼関係を形成するために重要と言えるものがほとんどである。筆者自身が注目した項目は 1 点もなかった 9 つの特性である。予備調査で必要と感じ記入していただいた特性であることを考慮すると，現在の生徒指導主任が上位には当てはめていない特性も，状況によっては大変重要な特性となっているということも考えておくべきではないかということである。例えば，「一芸に秀でている」（私自身の考えとしては，飛び抜けてすごい芸でなくとも，生徒ががんばればできる程度の芸でも良いと思う）では，生徒に教師の人間としての魅力を与え尊敬の念を得ることができるであろうし，「いろいろな体験をさせられる」ことは生徒に学校の魅力を与え，学校生活へのやる気につながるであろう。それらが結果的に納得させる指導，つまり指導が入ることにつながるのではないだろうか。

表 4　主任が必要と選んだ特性順

順位	番号	特性	得点
1 位	3	信頼されている	34
2 位	9	間違いや甘えを許さないきっちりとした基準をもち誤ったことは毅然と厳しく指導ができる	22
3 位	2	日常的な関わりを持つ（コミュニケーション）	17
4 位	4	子どもに対する熱い思いがある	15
5 位	43	個に応じた指導（臨機応変な対応）ができる	13
6 位	7	納得させる説得力（わかりやすいことば）がある	12
6 位	31	人権感覚が鋭い（いじめ等を見抜く力がある）	12
8 位	37	生徒への愛情を持っている	10
8 位	41	諸問題を早期発見できる	10
10 位	30	指導のセンスがある	9
10 位	45	長期的な視野を持って忍耐強く指導できる	9
12 位	1	あたたかさ、やさしさがある	8
12 位	11	ほめることがしっかりできる	8
12 位	14	公平に生徒と接する	8
12 位	17	指導の手順がよい	8
16 位	8	共感的な態度がとれる	7
16 位	23	日常的に家庭訪問ができ保護者と連携できている	7
16 位	44	生徒の活躍できる場面を仕掛け、評価し自信をもたせることができる	7
19 位	42	いじめを許さない姿勢がある	6
20 位	18	『わかる授業』ができる	5
20 位	19	授業規律がある	5
20 位	24	保護者に対して謙虚な姿勢がとれる	5
20 位	35	生徒に見通しを持たすことができる	5
24 位	28	生徒との約束を守る	4
24 位	29	生徒の立場の理解ができる	4
24 位	48	声かけがうまい	4
27 位	10	子どもとたわいのない話ができる	3
27 位	20	熱心な部活指導ができる	3
27 位	39	本音を語れる	3
27 位	49	指導の際、場面によっては待つこともできる	3
27 位	50	自分の失敗はすぐに認めることができる	3
32 位	12	自分の経験を語ることができる	2
32 位	15	明るく笑顔が多い	2
32 位	16	聞くことが上手	2
35 位	5	心が広い（寛容、受容）	1
35 位	21	何事も最後までやりきらせることができる	1
35 位	25	忙しくても生徒の相談に応じられる	1
35 位	27	熱中できるものを持っている	1
35 位	32	心に余裕がある	1
35 位	36	感情的にならない	1
35 位	47	生徒が一緒にいて楽しいと感じる	1
42 位	6	体が大きい（力が強い）	0
42 位	13	高圧的でない（大声で怒らない等）	0
42 位	22	言葉遣いがよい	0
42 位	26	一芸に秀でている	0
42 位	33	常に全力でのぞむ	0
42 位	34	生徒に立場の自覚を促している	0
42 位	38	自分の意見を押しつけない	0
42 位	40	いろいろな体験をさせられる	0
42 位	46	みんなの前では叱らない	0

②必要性の平均値の順位

生徒指導主任にアンケートに協力いただいた全50項目の特性の必要性の平均値の一覧を以下に示す(表5)。これは特に必要と直感的に答えていただいたものとは違い，総合的に記入していただいた各項目の平均値の高得点の順位である。しかし，生徒指導主任が必要性が高いと選んだ特性順位の結果と同様に「信頼されている」が上位にきている。最も高いのは「いじめを許さない姿勢がある」であるが，これは生徒指導主任としての特性だけでなく，人間として必要な特性と考えれば，当然の結果といえよう。特に4点に近い特性は非常に重要な特性といえる。また45項目が3点以上でどちらかと言えば必要と感じていることになる。このことからほとんどの項目は生徒指導を行う上で大変重要な特性であると考えられる。しかし，3点以下であっても，少なくとも必要と感じる先生方がおり，実際にその項目が指導に役立つことがあるという事実も忘れてはならない。

表5　必要性の平均値の特性順位

順位	番号	特性	平均値
1位	42①	いじめを許さない姿勢がある	3.97
2位	3①	信頼されている	3.94
2位	19①	授業規律がある	3.94
4位	31①	人権感覚が鋭い（いじめ等を見抜く力がある）	3.91
5位	1①	あたたかさ、やさしさがある	3.89
5位	2①	日常的な関わりを持つ（コミュニケーション）	3.89
7位	28①	生徒との約束を守る	3.89
8位	37①	生徒への愛情を持っている	3.88
9位	4①	子どもに対する熱い思いがある	3.86
10位	43①	個に応じた指導（臨機応変な対応）ができる	3.85
11位	41①	諸問題を早期発見できる	3.83
12位	7①	納得させる説得力（わかりやすいことば）がある	3.82
13位	17①	指導の手順がよい	3.82
14位	18①	『わかる授業』ができる	3.78
14位	32①	心に余裕がある	3.78
16位	9①	間違いや甘えを許さないきっちりとした基準をもち誤ったことには毅然と厳しく指導できる	3.77
16位	16①	聞くことが上手	3.77
18位	11①	ほめることがしっかりできる	3.75
18位	25①	忙しくても生徒の相談に応じられる	3.75
18位	29①	生徒の立場の理解ができる	3.75
18位	45①	長期的な視野を持って忍耐強く指導できる	3.75
22位	14①	公平に生徒と接する	3.72
23位	44①	生徒の活躍できる場面を仕掛け，評価し自信を持たせることができる	3.71
23位	49①	指導の際、場面によっては待つこともできる	3.71
25位	48①	声かけがうまい	3.69
26位	8①	共感的な態度がとれる	3.66
26位	50①	自分の失敗はすぐに認めることができる	3.66
28位	35①	生徒に見通しを持たすことができる	3.63
29位	5①	心が広い（寛容、受容）	3.62
30位	20①	熱心な部活指導ができる	3.58
31位	30①	指導のセンスがある	3.57
32位	23①	日常的に家庭訪問ができ保護者と連携できている	3.55
33位	21①	何事も最後までやりきらせることができる	3.54
34位	24①	保護者に対して謙虚な姿勢がとれる	3.51
35位	10①	子どもとたわいのない話ができる	3.48
36位	39①	本音を語れる	3.45
37位	36①	感情的にならない	3.37
38位	22①	言葉遣いがよい	3.32

39 位	12 ①	自分の経験を語ることができる	3.31
39 位	38 ①	自分の意見を押しつけない	3.31
41 位	34 ①	生徒に立場の自覚を促している	3.28
42 位	47 ①	生徒が一緒にいて楽しいと感じる	3.25
43 位	15 ①	明るく笑顔が多い	3.22
43 位	33 ①	常に全力でのぞむ	3.22
45 位	40 ①	いろいろな体験をさせられる	3.19
46 位	27 ①	熱中できるものを持っている	2.88
47 位	13 ①	高圧的でない（大声で怒らない等）	2.78
48 位	46 ①	みんなの前では叱らない	2.69
49 位	26 ①	一芸に秀でている	2.31
50 位	6 ①	体が大きい（力が強い）	2.09

③実態の平均値の順位

生徒指導主任にアンケートに協力いただいた全 50 項目の生徒指導主任自身の実態の平均値の順位が以下に示す，「実態の平均値の特性順位」（表 6）である。これは生徒指導主任の実態を見たものであるために必要度ほどの高い平均値は得ることができていないことがわかる。しかし必要性と同様に「いじめを許さない姿勢がある」が 1 位になっている。先にも述べたが，これは社会人として最低限必要とされる特性であることからこの順位になったことは納得できるところである。しかし必要性で上位にきていた「信頼されている」が 21 位と中位に下降している。これは教師が信頼されているかどうかの判断が難しいと理解することもできる。全体の平均値を見ると，教師の実態に当てはまっているに値する 3 点以上の項目が 17 項目であり，必要度に比べると少なく，教師の実態においては出来ていないということが多いと判断され。ただ上位にきている項目は多くの先生方が身につけている特性ととらえることができるので，基本的に身につけておくべき特性と考えられる。このことから，課題は，必要性を感じながら実態が伴っていない項目ということになる。その項目が下記の「必要性－実態の平均値の特性順位」と言える。

表 6　実態の平均値の特性順位

順位	番号	特性	平均値
1 位	42 ②	いじめを許さない姿勢がある	3.49
2 位	28 ②	生徒との約束を守る	3.42
3 位	20 ②	熱心な部活指導ができる	3.31
4 位	19 ②	授業規律がある	3.28
5 位	2 ②	日常的な関わりを持つ（コミュニケーション）	3.26
6 位	1 ②	あたたかさ、やさしさがある	3.23
6 位	4 ②	子どもに対する熱い思いがある	3.23
6 位	29 ②	生徒の立場の理解ができる	3.23
6 位	37 ②	生徒への愛情を持っている	3.23
10 位	43 ②	個に応じた指導（臨機応変な対応）ができる	3.18
11 位	14 ②	公平に生徒と接する	3.17
11 位	50 ②	自分の失敗はすぐに認めることができる	3.17
13 位	10 ②	子どもとたわいのない話ができる	3.14
13 位	24 ②	保護者に対して謙虚な姿勢がとれる	3.14
15 位	49 ②	指導の際、場面によっては待つこともできる	3.11
16 位	9 ②	間違いや甘えを許さないきっちりとした基準をもち誤ったことには毅然と厳しく指導できる	3.00
16 位	25 ②	忙しくても生徒の相談に応じられる	3.00
18 位	31 ②	人権感覚が鋭い（いじめ等を見抜く力がある）	2.98
19 位	5 ②	心が広い（寛容、受容）	2.97
20 位	12 ②	自分の経験を語ることができる	2.95

21 位	3 ②	信頼されている	2.94
21 位	8 ②	共感的な態度がとれる	2.94
21 位	11 ②	ほめることがしっかりできる	2.94
24 位	7 ②	納得させる説得力（わかりやすいことば）がある	2.91
25 位	39 ②	本音を語れる	2.89
26 位	41 ②	諸問題を早期発見できる	2.86
27 位	16 ②	聞くことが上手	2.83
27 位	17 ②	指導の手順がよい	2.83
27 位	18 ②	『わかる授業』ができる	2.83
30 位	21 ②	何事も最後までやりきらせることができる	2.78
30 位	45 ②	長期的な視野を持って忍耐強く指導できる	2.78
32 位	34 ②	生徒に立場の自覚を促している	2.77
33 位	23 ②	日常的に家庭訪問ができ保護者と連携できている	2.74
34 位	15 ②	明るく笑顔が多い	2.72
34 位	38 ②	自分の意見を押しつけない	2.72
36 位	47 ②	生徒が一緒にいて楽しいと感じる	2.69
36 位	48 ②	声かけがうまい	2.69
38 位	35 ②	生徒に見通しを持たすことができる	2.68
39 位	33 ②	常に全力でのぞむ	2.66
40 位	27 ②	熱中できるものを持っている	2.65
41 位	36 ②	感情的にならない	2.65
41 位	44 ②	生徒の活躍できる場面を仕掛け、評価し自信を持たせることができる	2.65
43 位	6 ②	体が大きい（力が強い）	2.63
44 位	13 ②	高圧的でない（大声で怒らない等）	2.60
45 位	30 ②	指導のセンスがある	2.58
45 位	32 ②	心に余裕がある	2.58
47 位	40 ②	いろいろな体験をさせられる	2.47
48 位	46 ②	みんなの前では叱らない	2.40
49 位	22 ②	言葉遣いがよい	2.37
50 位	26 ②	一芸に秀でている	2.02

④必要性－実態の平均値の特性順位

生徒指導主任にアンケートに協力いただいた全 50 項目の生徒指導主任が必要と感じる特性の平均値から教師の実態の平均値を引いた順位が以下に示す,「必要性の平均値－実態の平均値の特性順位」（表 7）である。必要と感じながら実態が伴っていないという観点から考えると，上位の特性は特に身につけるべき特性であり，生徒指導主任の今後の課題とされる特性と言えるのではないだろうか。そのトップとなっているのは【ゆとり】因子に分類される項目の「心に余裕がある」である。日々忙しいことの多い学校教職員に対する警鐘として検討すべき項目ではないかとも感じる。これは個人の問題だけではないので，大きなレベルでの解決策も必要であろう。心に余裕がない生徒指導主任が多いのが現在の実情なのである。

【ゆとり】因子である「心に余裕がある」が 1 位になったが，それでは上位にあたる 10 位までの計 12 項目の特性の因子は何かということに着目すると,【受容】因子が 3 項目,【指導力】因子が 4 項目,【ゆとり】因子が 4 項目，他が 1 項目であり，3 つの因子は，ほぼバランスを保ち，上位に位置づけされていた。つまり，3 つの因子の中で，飛び抜けて身につけるべき因子が存在するわけではなく，そのことからも 3 つの因子の特性をバランスよく，身につけるべき事が教師にとって重要と言えるのではないだろうか。

上位以外の特性についても，教師の努力により，身につけることのできる特性については生徒指導主任は参考にすべきである。

表 7　必要性の平均値－実態の平均値の特性順位

順位	番号	特性	差
1 位	32 ①	心に余裕がある	1.2
2 位	44 ①	生徒の活躍できる場面を仕掛け、評価し自信持たせることができる	1.06
3 位	3 ①	信頼されている	1
3 位	48 ①	声かけがうまい	1
5 位	17 ①	指導の手順がよい	0.99
5 位	30 ①	指導のセンスがある	0.99
7 位	31 ①	人権感覚が鋭い（いじめ等を見抜く力がある）	0.97
7 位	41 ①	諸問題を早期発見できる	0.97
7 位	45 ①	長期的な視野を持って忍耐強く指導できる	0.97
10 位	18 ①	『わかる授業』ができる	0.95
10 位	22 ①	言葉遣いがよい	0.95
10 位	35 ①	生徒に見通しを持たすことができる	0.95
13 位	16 ①	聞くことが上手	0.94
14 位	7 ①	納得させる説得力（わかりやすいことば）がある	0.91
15 位	11 ①	ほめることがしっかりできる	0.81
15 位	23 ①	日常的に家庭訪問ができ保護者と連携できている	0.81
17 位	9 ①	間違いや甘えを許さないきっちりとした基準をもち誤ったことには毅然と厳しく指導できる	0.77
18 位	21 ①	何事も最後までやりきらせることができる	0.76
19 位	25 ①	忙しくても生徒の相談に応じられる	0.75
20 位	8 ①	共感的な態度がとれる	0.72
20 位	36 ①	感情的にならない	0.72
20 位	40 ①	いろいろな体験をさせられる	0.72
23 位	43 ①	個に応じた指導（臨機応変な対応）ができる	0.67
24 位	1 ①	あたたかさ、やさしさがある	0.66
24 位	19 ①	授業規律がある	0.66
26 位	5 ①	心が広い（寛容、受容）	0.65
26 位	37 ①	生徒への愛情を持っている	0.65
28 位	2 ①	日常的な関わりを持つ（コミュニケーション）	0.63
28 位	4 ①	子どもに対する熱い思いがある	0.63
30 位	49 ①	指導の際、場面によっては待つこともできる	0.6
31 位	38 ①	自分の意見を押しつけない	0.59
32 位	33 ①	常に全力でのぞむ	0.56
32 位	39 ①	本音を語れる	0.56
32 位	47 ①	生徒が一緒にいて楽しいと感じる	0.56
35 位	14 ①	公平に生徒と接する	0.55
36 位	29 ①	生徒の立場の理解ができる	0.52
37 位	34 ①	生徒に立場の自覚を促している	0.51
38 位	15 ①	明るく笑顔が多い	0.5
39 位	50 ①	自分の失敗はすぐに認めることができる	0.49
40 位	42 ①	いじめを許さない姿勢がある	0.48
41 位	28 ①	生徒との約束を守る	0.47
42 位	24 ①	保護者に対して謙虚な姿勢がとれる	0.37
43 位	12 ①	自分の経験を語ることができる	0.36
44 位	10 ①	子どもとたわいのない話ができる	0.34
45 位	26 ①	一芸に秀でている	0.29
45 位	46 ①	みんなの前では叱らない	0.29
47 位	20 ①	熱心な部活指導ができる	0.27
48 位	27 ①	熱中できるものを持っている	0.23
49 位	13 ①	高圧的でない（大声で怒らない等）	0.18
50 位	6 ①	体が大きい（力が強い）	-0.54

2　生徒指導主任へのインタビューの結果及び考察

それぞれ状況の異なる 5 つの学校で，生徒指導主任へのインタビューを行なった中で，共通してい

る事やその中で調査者自身が感じたことをまとめる。

(1) 各校の現状

まず生徒の現状と生徒指導の取組という点では，生徒の現状は荒れた状態の学校と落ち着いた学校，両極端な状況であった。今回のインタビューでは大規模校での生徒指導及び職員間の連携の難しさが伝わってきた。問題行動という点では大規模校は様々な生徒が存在し，日々，事象が発生することが多いようであるが，共通する問題点としては，不登校や，別室登校があげられた。問題事象等への取組としては生徒指導部会を行い，生徒の現状を伝え，各教職員が生徒を共通理解する取組をされている。やはり，各教師が生徒をしっかり理解することの大切さを改めて感じるところである。不登校や別室登校につても同様に各教師が共通理解できるような取組をされていた。

(2) 加害者の意見を聞くことの重要性と不登校生徒への対応

次に，生徒指導の有効な方法としては問題事象が発生した場合，加害者の意見をしっかりと聞くことの重要性を語られる先生方が多かった。不登校の指導は担任が家庭訪問で関わるだけでなく，養護教諭や教育相談部などとの連携や，スクールカウンセラーからのコンサルテーションを参考にされているようである。別室登校では不登校同様に空き時間の教師が指導に当たるなど，全教職員で指導に当たる体制がとられている事が多い。

(3) 信頼関係の重要性

それでは生徒指導上の諸問題を引き起こす生徒達に対して行う指導上大切にしていることや必要だと思う特性は何かということを問うと，その原点は信頼感を得ると言うことであった。そのためには，いかに上手く，生徒や保護者と関わるかということである。関わりの中で信頼関係は形成されていくということになる。生徒と関わる場面は，教科指導，部活動，休み時間等様々で，どの場面を中心に信頼を得ていくかは各先生によってさまざまであった。また，今回のインタビューをした先生方の特徴として，筆者自身が感じた特性として，「やさしさやあたたかさを主に感じる先生ではあるが，厳しさもしっかり感じる」先生方であった。関わりをしっかり持ちながらも，甘えは許さない各先生方の雰囲気を，生徒も敏感に感じているのだろうと感じられた。

(4) 失敗から学ぶ

教師は生徒に対して真剣に関わり，生徒の成長を望み，指導に当たるわけだが，時には指導上，失敗をするときもある。生徒には申し訳ないが，前向きに考えると，教師としてはそのことをきっかけに自らを成長させるチャンスとも言える。今回の先生方も失敗から学んだことを教えていただいた。内容は様々であるが大変参考になることである。人間として失敗を認め，同じ過ちを繰り返さないようにすることは当然のことであるが，その失敗に気付くことがまず大切であると考える。また，その失敗を教師間でしっかり指摘し合いながら，協力できる職場でありたいものである。

(5) 現在の学校や教師の課題

各先生方が現在感じておられる学校の課題として，保護者の問題がよく出てきた。今，マスコミでも騒がれているモンスターペアレントの存在が学校や生徒達に悪影響を及ぼすことを懸念されているようである。また，有効な生徒指導を行うには，教師間の認め合いや仲の良さがまずは重要と感じられていた。情報化社会と呼ばれる中，各学校でも，インターネットや携帯電話に関わる事象も発生しているようで，その件に関しても警戒されているようである。自分の課題としては生徒指導主任としてリーダーシップをとれるよう努力することを感じておられた。

(6) ゆとり確保に向けて

最後に学校における教師のゆとりの現状とゆとり確保の取組についてだが，今回の学校では全体的に教師は，帰宅が遅く，部活動で土日の休みもしっかりとれていないのが現状であった。従って，そろってゆとりのなさは感じられているようであった。大規模校では各教師により，帰宅時間の差が激しいことも課題として感じられているようである。取り組みとしては特に有効な取り組みは無いようで，どのように教師がゆとりを持つかが学校として考えるべき課題ととらえることができるのではないだろうか。

Ⅳ．総合考察

本研究の目的で「指導がしっかりできる生徒指導力のある教師にはどのような特性が備わっているのか」という点については，これまでに述べてきたのが現状である。そこで「今の時代に共通して取り組むべき事は何なのか」ということについて総合的な視点で考察し，述べていきたい。

1　生徒指導主任の特性について

(1) 学ぶべき特性と，生徒指導主任の特性の実態

予備調査により教師に必要と思われる，多くの特性を把握することができた。まず，一つ一つを確認し，自分に備わっているかどうかを自己判断し，自己を振り返る材料になればと思う。自分が必要と感じた特性を身につけることができれば，場面によっては今後の生徒指導へ有効に活用できるであろうと判断する。

また，本調査の集計を行い，各項目の因子分析，担任の有無，学校現場の地域，教職経験年数，通算生徒指導主任経験年数，専門教科，担当の部活動，所属学年，生徒数により，t 検定，分散分析をすることにより，特性によっては，生徒指導主任の実態に差があることも確認でき，考察することができた。いくら生徒指導力が高い生徒指導主任であっても課題はあるものである。生徒指導主任は生徒の実態把握だけではなく，自分の特性を把握すると共に周りの職員の特性を把握し，連携した生徒指導を行う重要性を改めて感じた。

(2)【受容】【指導力】【ゆとり】のバランスの重要性

生徒指導主任への本調査により，その特性の実態は明らかになった。生徒指導に必要な教師の特性は大きく分けると【受容】【指導力】【ゆとり】が総合して存在することが因子分析により判断できた。細かく見ていくと多くの特性があるわけだが，生徒指導力を高めるにはこの 3 つのバランスが重要であると考える。しかし 3 つの特性を 1 人で兼ね揃えるのは現実的には難しい。そのような場合の取組として，先にも述べたが，連携した生徒指導，例えば，厳しい指導の後には，養護教諭がフォローする等の役割分担も必要と言えよう。

2　今後の生徒指導上の諸問題に対する取り組みの方向性と教師の意識について

(1) 信頼関係の重要性

本調査によるアンケート調査やインタビューから，生徒指導においてまず重要なことは信頼関係の形成ということが言える。信頼関係を形成するために多くの特性が存在すると言っても過言ではないとも述べた。やはり教師は生徒との信頼関係の上に教育が成り立つことを感じているのである。では，

その信頼関係を形成して行くにはどのような関わりが重要なのであろうか。

インタビューからも学んだように，教科指導で生徒を引きつけて楽しい授業をすること，部活動で厳しい指導により，その結果，充実感を持たせること，休み時間にたわいのない話をすること，等の関わりにより信頼関係を形成するチャンスが学校ではいくらでもあると言える。もちろん担任はクラスの生徒と深い絆で結ばれることが望まれる。その中で信頼関係が育まれれば，学校への信頼にもつながるであろう。

しかし，そう簡単に信頼関係を結べるわけではないことも事実であり，現に学級崩壊は深刻な問題に発展している。そのような事実がまた学校不信にもつながり，悪循環をもたらしていることもある。そのような状態では教師間の連携もおろそかになるであろう。そうならないように教師一人一人が，高い指導力を身につけることが重要と考える。

まず，高い指導力を身につけるには，身近に存在する，生徒指導主任の先生や，生徒が素直に指導を聞き入れる教師から学ぶことが重要と考える。授業，部活，その他での関わりの中で生徒に対して，話の仕方やほめ方，叱り方，行動やそのタイミングを観察し，良い部分を吸収するのである。当然，それらの教師と同じような指導をしても同じように生徒が指導を聞き入れてくれないこともあるだろう。そのようなときは，自分を高めるためにも，思い切って同僚教師に気持ちを打ち明け，アドバイスをいただくことも必要であろう。また，同じ指導であっても，自分流の方法を見つけることも大切である。逆に考えると，新任の若い教師には，ベテラン教師や，生徒指導力の高い教師が，しっかりと目を向け，生徒同様に，支援することを忘れてはならない。教師一人が問題を抱えずに，チームとして対応することも重要なのである。そのことにより，全ての教師，生徒が成長し，落ち着いた学校へと結びついていくだろう。また，生徒指導の研修会や，他校との意見交流が参考になることもある。しかし，実践の中で，生徒指導においては，多様な生徒が存在し，ベテラン教師や，生徒指導力の高い教師も失敗することがある。そのようなときはしっかりと失敗を認め，何が悪かったかを分析し，次の指導へとつなげる必要がある。失敗を認めなかったり，自分を正当化したりしようとすると，事態は悪化の方向へと導かれることが予想される。

(2) 生徒指導上の諸問題への対応

いくら落ち着いた学校でも多少の問題事象は発生するものである。とりわけ荒れた学校では，その対応において，生徒指導力は重要なものとなる。いざ問題事象が発生した場合，どのような対応が重要かを述べる。

まず，対応の前段階として，生徒指導部からの指導方針を，教師が共通認識することから始まる。方針は学校によって若干の違いはあるであろうが，教師が規律指導の重要性を認識し，全教職員が「ぶれない」指導を行う事が絶対に必要であろう。全教職員が「ダメなことはダメ」という意識を持って，毅然とした態度で指導することである。

職員会議や生徒指導交流会等により生徒の情報を得ることは大変重要であり，生徒理解につながるが，決められた会議以外でも普段から職員室などで生徒の情報を共有する事も，早く生徒の情報をキャッチするという観点では大切なことであり，そのようなことが出来る職場は，職員の団結力が強く，信頼し合えている職場と考えることができる。

問題事象が多発する環境では，教師が指導への限界や，あきらめが生じ，問題をさほど大きな問題とはとらえられなくなる，という感覚の麻痺が生じてくる。そのようなことがないように気をつけたいが，もしも気になるようであれば，落ち着いた学校を参観することによって，どのような状態が望

ましいかという感覚が戻る場合もあるだろう。

重要な対応の一つとしてあげられるのが，問題の早期発見である。問題を早期に発見するということが，大きな問題へと発展させないことにつながる。いじめの問題で考えるならば，いじめがあった場合，それを「遊びだと思い，いじめとは思わなかった」では，教師は通用しない。従って教師が問題を問題としてしっかり認識できるかどうかが早期発見のポイントになってくるだろう。又，学校やクラスに落ち着きがないようであれば，休み時間も教室で生徒と関わる事によって，問題を早期に発見し，早期対応ができることにもつながるであろう。その際，当然休み時間の関わり方には十分生徒に配慮し，見張られているという意識を生徒に持たせてはいけない。このようにいじめが出来ない状態を作ることも重要だが，さらに普段からいじめを許さない教師の訴えは必要不可欠といえる。

しかし，どんな対策を立てていても問題事象が発生する場合がある。その際，被害者と加害者が存在するわけだが，その生徒達と関わる際に重要なポイントとしていえるのが，被害者だけにとどまらず，加害者の思いもしっかりと聞くことである。特に加害者に対し，過ちに対してだけの一方的な指導や感情的な指導になると，問題を繰り返すことにつながる。加害者に対して共感できる部分は共感しながらも，悪かったことを自覚させ，納得して謝罪させることが大切である。また，観衆や，傍観者がいた場合はそれらの生徒への指導も再発防止のために行わなければならない。当然指導は組織的に複数で行い，家庭への連絡は必要である。

生徒への指導で気をつけなくてはいけないことは，個に応じた指導及び生徒の心理状態を把握して指導に当たる必要があるということだ。個に応じた指導では，場所や喋り方のトーンや大きさにも気を遣い，指導を生徒が理解できているかどうかを確認しなくてはならない。生徒は知的に低かったり，発達障害であったり，キレやすかったりすることもあるので，指導をする際，生徒をいかに教師が理解しているかという事も大切である。生徒の心理状態を把握して指導に当たるという点での対応例としては，平常時には一斉指導，モヤモヤしている時やがっかりした時にはカウンセリング的な対応，イライラしている時には毅然とした対応，キレた状態の時は静観，その際，暴力的な行動に出た場合は安全確保のために押さえる等，が考えられるが，当然，状況に応じて臨機応変に対応することが必要となる。

不登校や別室登校生徒への対応はインタビューからも理解できるように単一ではない。それぞれのケースを迅速，丁寧に見立てることが重要となる。強引に引っ張りだす場合や逆に見守るだけで事態が好転する場合もあるが，現実にはそううまくいかないケースが多いと思われる。その要因には本人，学校，家庭等によるものがあるが，それらが複雑に絡み合っている場合もある。焦っても解決につながりにくい事もあるので，教育相談部やスクールカウンセラーと共に組織的に対応することが重要と思われる。場合によっては福祉施設との連携も必要である。筆者の知る施設で，児童相談所から措置されて入所し，学校に登校している生徒がいる。その施設には不登校であった生徒も多数いるが，誰一人休まず（風邪などの病気を除き）登校している。そのことから環境の変化が心理面にも大きく影響し，解決に向かうことがよくわかる。

(3) 生徒指導上の諸問題についての未然防止に向けて

根本的に事後指導よりも事前指導の重要性を多くの教師は感じているところである。事前指導をしっかり行えるかどうかが，諸問題を未然防止することにつながるのである。

問題を未然防止するために生徒へ適切な指導はどの学校でも行われていると思われるが，その指導がしっかりと入るためには，学校が落ち着いていることが望ましい。しかし荒れている学校も含めて，

先にも述べたが，各生徒の理解が教師としては必要であろう。芳賀（2007）は「子どもの立場に立って，どのように思いを抱いているかを推し量ることから理解が始まる。子どもの内面に隠されている気持ちを共感的に理解することが，気づきとなって問題を明確に出来る」と述べている。生徒を理解することによって，生徒のサイン（服装，行動，態度，表情等）に気づき，早期発見，早期対応へとつながる。このことにより再度，生徒との関わり，つまり信頼関係の重要性を感じ取れるのである。先に問題を問題と感じ取れる力が教師には必要と述べた。その力を有することができれば，少なくとも問題の早期発見はでき，未然防止に取り組めるということになる。その力を有するには経験が必要とも述べた。

しかし，それ以外にも筆者（伊賀）の経験から必要と感じられるものがある。それは直感力であり，センスである。直感力や，指導のセンスは本来その人に備わったものと考えると，身につけにくい特性である。予備調査では必要な特性の一つに「オーラが出ている」と回答していただいた先生もあった。確かに何を言っても皆が納得できる先生はこれに当てはまると考えられる。そのようになるには自身を相当洗練し，努力する必要があるだろう。また，インタビューさせていただいた先生の中には「直接関わることの少ない生徒も言うことをしっかり聞く」という実態があることを聞いた。それは言い換えると，多くの生徒から信頼を得ていると考えることが出来る。従って，全ての生徒との関わりにだけによって信頼関係は生まれるのではく，一定の生徒との深い信頼関係が周りの生徒にも影響し，その先生はすごいという意識が広がるのではないだろうか。テレビや新聞などの情報により，気持ちが左右されることもあるので，教師も自分の行動や発言に責任を持つことの重要性を感じる。

本研究の調査やインタビューを通して，生徒指導だけに関わらず，学校での指導において，自分に与えられた時間の中で最高の準備（教材研究，打ち合わせ等）を行い，最悪の予測も考えた姿勢で指導に臨むことができれば，その対応に余裕が持てるのではないだろうかということが示唆された。

Ⅴ．引用・参考文献

引用文献

文部科学省　2007a　生徒指導の意義

文部科学省　2007b　生徒指導上の諸問題について

芳賀明子　2007　新編　生徒指導読本「子どものサインの把握と早期発見・早期対応」教育開発研究所

参考文献

文部科学省　2005　生徒指導上の諸問題に関する調査研究会報告書

友久久夫　2005　学校カウンセリング入門　ミネルヴァ書房

大木みわ　2007　「子どもと教師の信頼関係の確立」　新編生徒指導読本 教育開発研究所

井田延夫　2007　「生徒指導の基本的な指導のあり方・手法」　新編生徒指導読本 教育開発研究所

嶋崎政夫　2007　「生徒指導とゼロトレランスの指導」新編生徒指導読本 教育開発研究所

吉澤世保　2007　「生徒指導と教職員の共通理解・役割分担の明確化」　新編生徒指導読本 教育開発研究所

水上和夫　2007　「生徒指導と学級担任の役割」　新編生徒指導読本 教育開発研究所

米津光治　2007 「いじめへの対応」 新編生徒指導読本 教育開発研究所
藤平敦　2007 「暴力行為への対応」 新編生徒指導読本 教育開発研究所
小澤美代子　2007 「不登校への対応」 新編生徒指導読本 教育開発研究所